
蒼神の軌跡「第三章の一歩手前」：前編

肥後魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼神の軌跡「第三章の一歩手前」：前編

【NNコード】

N9153N

【作者名】

肥後魚

【あらすじ】

蒼神の軌跡：第三章に繋がる短編の前半。

少年、片崎次真は時間にして五年間程の修行の旅の最後の地で剣術の修行に励んでいた。そんな折、道場の当主の孫、北郷一刀と試合することになり・・・

一刀は魏 の後の姿です。

(前書き)

次真が強くなる途上の位置です。この世界では魔法は基本使いません。

この頃、次真は一人で異世界を巡る修行の旅に出でた。そこで様々な戦闘技術…、拳法、剣術、射撃、特殊能力…。瞬く間に習得し、極めていった。

…これは、そんな彼がある世界にて剣を極めていた頃のちょっとした話。

次真Side

第095世界・日本国・九州某所

「せいつ！ やあつ！」

次真は素振りを繰り返している。だが、手に握られているのは竹刀でも木刀でもない。それらとほぼ同じ長さをした木の棒である。彼が行っているのは日本の剣術の一つ、「示現流」の稽古。この流派では木刀などは使わず、こうして木の棒を振つて鍛えるのだ。元々、示現流は上段からの初太刀で相手を絶命させる一撃必殺的なもの。つまり、受け太刀などの細かい技術はいらない。必要なのは、振りの鋭さと重さ…。更にいえば、

「せいやああああーーーーー（バゴオオオン！ーーー）」

他の流派を学んでいても、示現流のこの練習を取り入れれば上段か

らの斬撃が破壊力を増すことができるのだ。ちなみに、次真は今の一撃で直径5mほどの岩を吹き飛ばした。木の棒は彼の「気」を纏わせているため、折れたりはしていない。

「まつまつま、精が出るの。」

「おひ、爺さんじやん。珍しいね、ここに来るなんて。」

次真が爺さんと呼んだ70歳程の老人は「北郷当主」という人である。下の名前はあるらしいが、何故か皆知らないらしい。次真もあって聞かずについた。

「それにしても、お主は筋がいいもんじや。もひ、『免許皆伝』を授けるこりかもなあ……。」

いつておかなかつたが、彼こそはこの辺り一帯では「示現流の天才」と呼ばれ、全国に名をとどろかす「北郷道場」の頂点に立つ男なのだ。無論、老人となつても剣の腕は衰えずにその風格は健在だった。

「いや、まだまだだよ。もう少し、ここで修行をせてもいいわ。」

「まつまつまつ……お主ほど修行を熱心にする若い連中は見たことが無いわい。まったくわしの孫にも見習つて欲しいものじや。」

「孫？ 爺さん孫いるの？」

「つむ、おる。名を一刀カズトといつてな。今は東京の『聖フランチエスカレ園』なるものに通つておる。たまにここに来て剣道を教えてやるのじやが、どうもやる氣が見えんのじや。というよりも、強くなつといつ意志が見当たらん……。お主とは正反対じやのう。」

次真は珍しく北郷当主が弱氣で話すことにして驚いているが、仕方ないとも思った。なにせ、この世界の日本は戦争など皆無なのだ。強さを求める理由が無い。・・・まあ、恋人が出来たりすれば別だわうが・・・。

「まあ、気長に待つてやればいいんじゃない？ 築さんで限つてすぐこの世に行くわけでもないし。」

「縁起でもないことをつぶおる。当たり前じゃ、こんなところでは死なんよ。」

「ははは、その意気だよ。まつ、俺がやる気満々のはこの世界が最後の修行の場だからなのが大きこよ。」

そう、彼はよつやくもとの世界に帰るのだ。一年ほどではあつたが、世界によつては時間の流れ方が違つたりするので実質は5年ほどの中田を過ごしたように感じる。

「ほほう、お主の旅も遂に終盤というわけじゃな。なるほど、やる気の出所はようわかつた。まあお主は基礎と活用は既に完璧だからな。後は秘技の習得くらこじやうひ。」

「『杉崩し』か・・・。OK、やつてみるよ。」

「ははははは、期待しておるがー。」

やつこつて北郷当主は道場へと戻つて行つた。

「さて、『杉崩し』の練習でもするかな。」

次真も、秘技の練習を始めるのであった。

5日後・北郷道場

次真是他の門下生らと撃ち合っていた。北郷道場では、示現流のほかにも普通の竹刀を使った剣道も教えている。ちなみに、今日は練習試合。ランダムの勝ち抜け戦だったのだが・・・。

「せいつーー（バシュツーーー）」

「あだつーーー！」

「胴あり、一本！ 勝者、片峠ーーー！」

『おおーー！（パチパチパチパチ）』

次真是圧倒的な強さで勝ち残っていた。彼は他の世界でも剣術修行を経験し、しかも三歳の時から両親に教わっていたのだ。（指導は相当甘かつたが・・・）いかにこの道場で強かろうと、まだ弱冠14歳でも物凄い才能のある彼に勝てるものはいないのだ。

「次真、やっぱり強いなあー」

先ほど次真が胴で一本勝ちしたのは、こここの塾頭・大隈義久。彼もまだ19歳と若い。

「いやいや、義久兄さんもやっぱり隙がないなあ。おかげで苦労させられたよ。」

次真はこの義久と非常に仲がいい。彼の剣は次真には少し及ばないが、透きとおつていて非常に綺麗なのだ。次真は尊敬の意も込めて彼を『義久兄さん』と呼んでいる。

「ははは、でも結局は隙を見つけられて撃たれたけどな」

「え、いや、その・・・」

「ははは、気にするな。負けは認めてるよ。」

そういうて、彼は次真の頭を撫でながら一緒に道場の端へと戻った。そして、彼と次真はそこで同年代の門下生とがやがや話し始めた。元々から人のいい次真である。五ヶ月前にここに来てからも、すぐに皆とも仲良くなつたのだ。また、何よりも彼の才能は何故か他人に悪印象を与えない。逆に惹かれるようなものなのだ。

「これこれ、まだ試合は残つとるだ。あんまり騒ぐでない。」

北郷当主からちょっと注意を受け、彼等は姿勢を正しながらも疑問に思う。特別指南の次真と塾頭の義久が最後まで勝ち残つていたので試合は最後だつたはず。まさか、当主が直々に次真とやるのではないかと緊張が走るが、当主は何故か次真を控え室に呼んだ。

「なんだい爺さん？ なんか不満でもあつた？」

「いやのう。お主、先日の話を覚えているか？」

「孫の話のこと？ 確か……、名前は一刀だつけ？ そいつがどうかした？」

「うむ……。実は三日前に息子の奥さんから電話があつてのう。一刀がたつた一日で、別に雨が降つたわけでも喧嘩したわけでもないのに制服をボロボロにして帰つてきたらしいのじや。しかも、『俺は三国志のキャラが全員女の子の世界にいた』とか、『彼女と共に霸道を突き進んだんだ！』なんて言つておつたらしい。」

「三国志の世界！？ しかも全員女の子！？」

「うむ……。お主、心当たりはないか？ お主も異世界の住人。何か知つておるのでないかと思つてのう……。」

「まあ……、確かに世界は膨大な数があるからな。そんな世界があつてもおかしくはないけど、どうやつてその世界行つたのかが分からぬいなあ……。」

「むむむ、そつか……。いきなりすまなんだ。これでもわしも祖父、心配でのう。」

「いいよいよ、こちこちそ力になれないでゴメンな。……まあ、話の経緯はなんか読めてきたよ。その一刀つて奴、ここにこいるんでしょう？」

「ほほう、そこまでお見通しか。つむ、そうなんじや。しかもじや、いまあれほど渋つていた剣道を本格的にやりたいなどと言つておつた。」

「そりやあよかつたじやん。」それで懸念が無くなつたろう。

「わうなんじやが……。あやつ、いの門下生と試合をしたいとぬかしたのじや。」

「こきなり試合! ? そりやあ無謀だろ、いの門下生はみんな一流揃いだ。そんないい加減に剣道を少し齧つてた奴が勝てるはずがない。」

「わう、わうなんじや。……じやがのう、わしは今たまげている。」

「

「ん? どうしたんだ?」

「いのほかに、山の麓の別館で残りの半分の門下生が同じく練習試合を行つておるのは知つてゐるな。」

「ああ、今朝早くの連絡事項の時に聞いたよ。」

「別館は23歳以上の大人のみがいつも稽古をしておる。正直言つて、経験がある分あの者達は本館の若い門下生よりも実力はほんの少し上じや。特に、一刀の年上の従兄弟である北郷鬼吉ホシゴウオニキチはお主には及ばんが、大隈に匹敵する強者じや。」

「へえ。そんなに強いなら、今度試合したいなあ」

「つむ。鬼吉もお主の話を聞いて回じ」とを言つておつた。が、当分無理じや。」

「…? なんかあつたのか?」

「今日の試合で強烈な面打ちを食らつて脳震盪を起こしてのう。一週間は安静じやと。」

「な…? だつてその人は別館では一番強いんだろ? それがなんで…?」

「一刀じや。」

「へつ?」

「一刀に完敗したんじや。鬼吉だけではない、別館の門下生は全員一刀に圧倒されて敗北した。」

「なつ…?」

「それは本当ですか師匠…?」

恐らくちょっと前から盗み聞きしていた義久が、入ってくるなり驚きの声を上げた。

「つむ、眞実じや。そしてぬかしあつた。…『本館の門下生に

も負けなことよ。とこづけつつも、こへり爺ひやが育てた門下生でも
今の俺には勝てない。』と……。』

「（ズンシ）舐めやがつて（怒）…………。」

義久は当然怒った。なにせこれは間接的には当主を侮辱したことと同じなのだ。それに、自分の腕を見下されたともいえる。

「まあまあ落ち着け。」

「むう……。けじよ次真、お前も馬鹿にされてんだぜ。腹立たないのか。」

「もちろん立つてゐや。爺やん、つまり俺達は一刀と試合をすればいいんだな。」

「おう……。なんだそりこりとか。」

「うむ、やうこうじじや。まあ一刀も悪氣は無こよつじや。本当に力を感じてこじらせて。まあ、鬼吉よりも腕の立つお主らはよつ上かは分からんがの。」

「ええ、その鼻つ柱をへし折つてしまふよ。」

「うむむ……。じやが、わしはひと恋ひじやを感じるのじやよ、一刀の剣に……。」

「まさか……、殺氣があるとか……？」

「その通りなんじゃ・・・。あれは倒すための剣というより、殺すための剣に見えて仕方ないのじゃ。次真、義久、お主らのようにな。」

「マジで?」

「なるほど・・・。」

ちなみに、次真が幾多もの命を奪ってきたことについては道場のみんなが知っている。が、ほとんどが半信半疑で実際に理解しているのは当主と義久、そして会った事はないが鬼吉だけである。また、義久も過去に仕方の無い事情で人を斬つたことがあるのでその様子は経験している。

「じゃが、お主らは切り替えといつものが出来る。特に次真、お主はそれが完璧に出来ている。だからこそ、秘技を伝授しようとしておるのじゃ。」

「でも確かに、義久兄さんは既に『杉崩し』を習得したと聞いてるけど。」

「ああ、もう使えるよ。」

そう。義久が次真よりも勝つているといひ秘技『杉崩し』を習得している点なのだ。

「マジ!? なら今度立ち会つたときを見せてよー。」

「そうだな。今度見せてやるよ。」

「やつた～！～」

「おひほん。」

「「あ～・・・（ササシ）」「

「でだ。今日こでもお主らに立ち合つてもうこたかったのじやが、ちと詫が長引かねたの。では畠田の午後にしよう。」

「了解～」

「わかりました。で、順番はどつします？」

「そりや俺が最初でしょ？ 年下なんだから。」

「いや、俺が先がいいよ。」

「え～？ なんで？」

「お前のまづが強いからだよ。おっと、それは紛れも無い事実だから、訳は無しな。」

「む～～」

「それに、正直言つてお前の手を煩わせるに値しないと思つかね。まあ相手が元気なうちに試合をしたいってのもあるけど。」

「はあああ、わかったよ・・・。爺さん、義久兄さんが先でいい？」

「つむ、依存は無いぞ。では今日せむつがつてよいぞ。道場で退屈してゐる他の者こも言つてこてくれば。されど、明日の稽古は一日を通して休みじや。」

「はいはーい

「わかりました。」

「ではのう

「「「お休みなさい。」」

せつじて、当主は道場の隣にある母屋に帰つていつた。次真と義久は道場へと戻り、今の話を門下生達に聞かせた。

「ふざけんな……」

「「「ひさき馬鹿にしてるのかよ！……！」」

「全く持つて腹が立つな……！」

案の定、全員がお怒りとなつた。

「みんな落ち着け。今騒いだつて始まらないだろ。」

「やつだぞ。まつ、明日の試合で俺等がフルボッコにしてやるから安心しな。」

「応！！ 頼んだぜ次真に塾頭！！！」

「一刀つて奴の自惚れを叩きのめしてくれ！！！」

彼等はワーウーと離し立て、一人も断然氣合が入った。といつても、義久が負けなければ次真に出番は無いのだが・・・。そして、家が近いものはそのまま帰宅し、遠いものは道場の向かい側の宿舎に戻つていた。

その時、次真と義久以外は氣づかなかつた。道場の外からこちらを覗く、不審な影に・・・。

「・・・負けない・・・。俺は、向こうに帰るまで、負けられない・・・。」

青年は、そう呟いた・・・。

「ふう～、さつぱりしたあ～」

次真は一日の疲れを癒すために少し遅めの風呂に入り、たつた今上がつて休憩室に来た。既に数人の先客がいて、テレビで野球観戦、オセロ、卓球などを楽しんでいた。

「おっ、上がったか次真。一緒に卓球どうだ?」

「やるやる～」

次真と同い年の重富齊昭シゲトミナリアキらに誘われ、次真は迷わず参加した。

カツ
コツ
コツ

風呂上りにそんなに汗はかきたくないので、基本的にはラリーのみである。一見つまらなそうではあるが、これが意外と楽しかったりする。

「なあ次真。」

「ん？ なんだ？」

齊昭はラリーを続けながら話し始めた。

「・・・お前つてさあ、本当に人を殺したことあんの？」

「・・・ああ、あるよ。それも、何千人と、ね・・・」

空気が一瞬で重くなるが、ラリーは止まらない。

「その殺した奴等って・・・、やつぱり悪人なのか？」

「それがほんとだな。ただ、証拠隠滅といつ名義で罪の無い人を殺めたことはある。」

「・・・そうか・・・。」

カツ

コツ

カツ

コツ・・・

齊昭は黙ってしまった。が、ラリーは続く。

「・・・人を殺すつて、どんなもんなの？」

隣で話を聞いていた、これまた同級生の土肥和那トイカズナが聞いてくる。

「最初は酷いもんだよ。相手が死んだつて分かつた瞬間、吐いちまう・・・。」

「じゃあ、慣れたらどうなの?」

「・・・・・何にも感じなくなる。そう、負い目も、後悔も・・・。」

「・・・・・。」

「・・・・・。」

和那も黙ってしまった。・・・いつの間にか、ラリーの相手は齊昭から2つ年上の海江田末男カイエタスエオに替わっていた。元々からあまり口数は多くないとはいえ、彼もまた口を開ざしている

「怖いか・・・? それとも、気持ち悪いか、俺が・・・?」

次真は自嘲氣味に苦笑しながら言った。

「まつ、それが当たり前さ。」

ケロリと続ける。・・・なにせ、次真は慣れている。嫌われる」とも、怖がられる」とも・・・。

「なら、俺達は異常だな」

「…？」

斎昭が口を開いた。

「そうね。私たちが変わり者らしいわね。」

和那もそう言つと、次真に歩み寄り、

「てか、いつ誰が次真を嫌つてると思つてんの？（ガシツームギ
ユウカウウカウウ…。）」

「…？ なつ！ いひやい、いひやいよかふな…。」

和那は次真の頬を思いつきりつねりはじめた。

「あんたは思いこみが激しいのよ。もう少し回りを信用しなさい。」

「むう、ひよ、ひようか~?」

「そうだ。俺達はそれを承知の上でお前を友人と思ってる。それを忘れるな。」

「お前は好き好んで殺したんじゃないんだろう？」
「なら何で嫌う必要があるんだよ。」

3人は怒りつつ、でも優しく言った。

「だから、安心して。あんたはあたし達の友達だよ」

תְּנַשְּׁאָלָה (תְּנַשְּׁאָלָה) ,

「な!? なんで涙流してんのよー!」

！？
た、誰か病なんかー！！！

一 自覺無し
か

「まあ、事実を受け止めとけ。」

「「「はははは～（笑）」」

「笑うな！」「！」

4人はいつもの調子を取り戻した。その後、結局卓球の真剣勝負をして汗をかいだため、もう一度風呂に入る羽田になってしまったのはご愛嬌。

そして、一回田の入浴後、

「というわけで、明日はがんばれよ……」

「ボツコボコにしてやつくなー。」

「・・・期待している。」

「あのさあ・・・、俺がやるつてことは、義久兄さんが負けるつてことだけど・・・。」

「・・・。ま、まあ、一応気合だけは入れとけよ。万が一つてこともあるし。」

「やうやく。意外に口口つて負けかけつかもよ、義久さん。」

「・・・試合は分からんからな。だから準備はしててもいいんじやな、あつ・・・・・。」

「?/?/? ビうしたの海江田さん? 何か後ろにい・・・あつ・・・・。」

。」

「ん? 後ろがどうかし・・・あつ・・・・。」

。」

「なんだよ～（笑）、まさか塾頭が後ろにいるわけじゃあるまいし～」

「イルヨ」

「へ？ あつ・・・。」

いつからいたのか、そこには義久が立っていた。手には、竹刀がある・・・。

「ア、アノ・・・。ドウカシマシタカ？」

「ダレガ、コロツテマケルツテ？」

「！――！―― イ、イヤアレハ・・・。」

「チョシトシタジヨウダンドダヨ・・・」

「フ～ン、ソウナンダ。」

義久はそういうと、竹刀を構えた。

「ナラ・・・。これも冗談だよなああああああああ――――――」

竹刀が振り下ろされ、

「（スパアアアアン……）あ！」おつ……」

末男にひいたし、彼は気絶した。

「「「ひ、ひいいいい……」（ブルブルブルブル）」」

「ちよつとしたお仕置き。でもすぐに済む。」

そういつて、義久は再び竹刀を構えなおす

「い、いやあああああ……」

「勘弁してえええええ……」

「てか、何で俺も!? 僕関係ないよおおおおお……」

ほぼ無関係の次真の必死の訴えに、義久は少し考えてから、

「うん……ついでに受けとこうか」

「理不尽だあああああああ……」

「言い訳無用、ならいくぞ~」

スババアアアアン！！！！！

3人は気絶した。

「一人は承印ござり、一刀……。」

当主の言葉に、青年・・・北郷一刀は無言で頷いた。

「にしても、半年前とは別人じゃのう。この前一体何があつたのかは知らんが、身にまとう雰囲気が変わつとる。」

「・・・・・」

一刀は無言のままである。

「お主、殺す気じゃつたろ・・・・・?」

「・・・・・」

「殺気が満ち溢れておつた・・・。ほとんどの者がお前と対峙した時
点で氣圧されておつたわい。唯一、鬼吉だけは平氣な顔をしておつ
たが、打ち合つてみればお主の圧勝・・・。正直、開いた口が塞が
らんかった。」

「・・・・・」

「わしが育てた門下生でも、今の自分には勝てんと言つたな・・・。
聞いた直後は腹が立つたが、今はあながち間違つておらんと黙つよ
うになつた。」

「・・・・・」

「じゃが、やはつ甘このお・・・・・。」

「・・・・・ビリビリ」と、爺ちゃん・・・?」

今まで黙りっぱなしだった一刀がようやく口を開いた。

「明日のお主の相手である大隈義久オオスミヨシヒサと片峠次真カタトウゲツマ・・・、あの二人は
桁違いじゃ。義久は、ここ10年では唯一この道場に伝わりし秘技

『杉崩し』を会得しておる。あれを使われば、おぬしも危なからう……。』

「……なら、それを使わせなければいい。杉崩しは瞬間的に出せる技じゃないでしょ？……なら、相手が全力になる前に決してしまえばいい。』

「うむ、まあその通りじゃな。じゃが、そう簡単にいくかは知らんがの。それに、その後に次真も残つとるぞ。』

「問題ないよ……。まだ14歳だろ？ いくら腕が立つといつても、まだガキだよ。正直いて、眼中にないよ。・・俺が体験してきたのは、そんな甘い世界じやなかつた。そして、あいつらが使う剣なんて、【彼女達】と比べれば『遊戯』だよ。』

一刀は淡々と話す。それを聞いた当主は、少し顔を歪ませた。

「……一刀。お主、わしの指導を馬鹿にしておる節は見当たりそうな口調だのう……。まあそれはいいとして、やはつおぬしは勝てんな。』

「なつ！？ どうこいつだと爺ちりやん……！……。』

淡白だった一刀が豹変し、当主につかみ寄る。その形相は半端ではない。

「言つた通りじゃ。義久は分からんとして、お主では絶対に次真には勝てん。』

「・・・理由は？」

ひとまず冷静さを取り戻した一刀は、尋ねた。

「お主が行つてきたといつ世界・・・。確か、『三国志の登場人物が全員女の子』といつとこりだつたかのう。一刀よ・・・、そこは世が乱れていたか？」

「ああ、物凄く。」

「戦はあつたか？」

「頻繁に。」

「人は死んだか？」

「数え切れないほど・・・。」

「じゃが、その中に希望はあつたか？」

「あつた。俺は、その希望の人にはわれた。」

「その希望と共に、何をした？」

「霸道を突き進んだ・・・。そして、大陸を平定して三国で治めるシステムを作り上げた。」

「愛は・・・、あつたか？」

「希望の・・・、魏のみんなと愛し合った・・・。」

「お主は、守ったか？ それとも、守られたか？」

「守られた時ばかりだった・・・。」

「そう、か・・・。その者に、鍛えられたか？」

「みつちりね。だから、強くなれた。2日前、今まで遠く及ばなかつた剣道部の先輩に、圧勝した。」

「その時、思ったのじやな。」

「ああ。・・・俺はまだまだ彼女達には全く届いていないけど、『強くなつた』・・・。」

「つむ、それは事実じや。」

「だから、俺は明日も負けない。いや、負けるわけにはいへん」「一刀よ。」

「・・・何、爺ちゃん？」

当主は一刀が話していた途中で割り込んだ。その顔は、無表情だが、確信めいたものだった。

「確かに、お主はその世界で自身を身体的に、精神的に強くしたよ
うじやじう」

「ああ。血盡できるほどじやないけど、何かが変わったよ。」

「ふむ・・・。じゃがの、一刀。お主は一つ勘違にしておる。」

「？？？」

「お主がしてきた体験、『それはこの世でお主のみにあつた』ことでも思つておるのか？」

「？？？」

「『お主以外にも、そのよつな』ことを体験してきた者はおりとども思つておるのか？」

「？？？」

「せう思つておるのならば、勘違にも甚だしいぞ。」

「・・・。」

一刀は言ひ言葉がなかつた。そんな彼を尻目に、お主は部屋を出て行つたが、ふと立ち止まつた。

「聞き忘れておつた。お主、あちらの世界で人を殺したか？」

「・・・ああ、殺したよ。爺ちゃん、俺が別の世界に行つたなんて言つて、よく疑わないね。」

「まあの。なにせ、既にこの道場には異世界からの客が着ておるか

うの。だから、ここにいる者はお主のよくな話は慣れてある。」

「片峠次真、だろ?」

「つむ。わしもあやつから異世界について詳しく聞いたからこそ、お主の話を綻わんのじや。」

「・・・話を戻すけど、なんで俺はあいつに勝てないの?」

「経験と努力、そして天性の才能じや。」

「経験と努力?」

「あやつは格が違う。お主のように無理やり他の世界に飛ばされるのではなく、自由に世界間を行き来して己を鍛えておるのじや。なればこそ、弱冠14歳ながらこの道場で経験豊富に稽古を積んだ義久らの上をいくておるのじや。」

「そ、そんなことどが出来るのかよ・・・。」

「出来るからこそ、やっておるのじや。それと、あやつには計り知れない天性の才能がある。」

「天性の才能? つまりは物凄い天才って訳?」

「そうじや。じゃがあのタイプの才能といつのは、普通にしていては開花する」とはい。」

「要は、普通じやない鍛錬が必要つて」と。

「つむ。しかも、眠つている才能が大きければ大きいほど鍛錬を要する。・・・そして、それを乗り切つたあと、目覚めた才能は・・・。」

「目覚めた才能は・・・?」

「・・・言葉に出来んほどの成長を遂げて行くのじや。現に、今の次真はどうどん才能を開花をせしむる。」

「・・・だから、勝てないと?」

「せうじや。それに・・・、」

「ん?」

「あやつは、何億とこつ生ける者ひを『葬つて』 あしむる。」

「ー? 殺したつて」と?、

「つむ。じやから、お主は次真には勝てんよ。まあ、明日は『杉崩し』の破り方でも学べば「爺ちゃん。」・・なんじや?」

一刀は、ゆっくり立ち上がりて言った。

「才能なんて、関係ない。長さなんて、意味ない。」

「なんじゃと・・・?」

「意味があるのは、『覚悟』の確証、だ。」

「な・・、なんと・・・!」

「ナポレオンが言つたんだってね。『私の辞書に不可能という文字はない』って・・・。あれ、俺の辞書も同じだから。」

「な、な・・・。」

「誓つたんだ、俺・・・。」

一刀は、告げた・・・。

「必ずあっちに戻る。そして、それまで俺は、『負けない』!」

「・・・・・」

『田の前にいるのは、本当に自分が知っている【孫】だらうか』、

当主は唖然とするしかなかつた。唖然としながらも、少し疑つた。

と・・・。

次真Side

翌日・午前・道場本館

次真と義久は、いつもよりも少し遅めに目が覚めた。その後、今日は午後まで時間があることもあって比較的ゆっくりと身支度を済ませた。そして、今は別々に最後の調整をしている。次真是齊昭との立ち合い、義久は素振りだ。

「せいつ！…（フォンッ）」

「つおつ！…（ガキンンッ）　ぬう・・・・、面つ！…（ビュンッ）」

「〔ニヤリ〕やあう！…（ヅッ）」

「うつ！…（ドスッ）」

「突きあり、一本。次真の勝ちね。」

和那の声で、次真の勝ちが決まった。

「はあああ・・・、今日は一段と動きがいいな～」

「そ、つか？ お前も中々だつたぞ」

「せなせ、言いやがつて~」

一つ言い忘れたが、斎昭は13歳の時に「全日本中学剣道大会・男子」で優勝経験があるので。なので、この道場でも結構強いほうだったりする。

「ふむふむ、次真は絶好調だな。」

義久も素振りを中断し、感心している。

「そういう義久兄さんも、今日は一段と剣が鋭いね。素振り見てて分かるよ。」

「ん? そうか。なら、今日のお前の出番はなーうだつたりする?」

ପ୍ରକାଶକାରୀ

「よつしやあ、頑張るぞー！」

「——！」

「おい、お取り込み中悪いんだが、ちょっとといいか?」

4人が意気込んでいた時、後ろから声が掛かつた。

「あれ？ 鬼吉さんじやん。」

「え！？ 」Jの人気が北郷鬼吉？」

「いかにもそうだけど？ 君が片崎次真かい？」

「ええ、そうです。」

坊主でグレー一色の胴着を着ている20代前半のちょつと怖いかんじの男、これが北郷鬼吉である。

「へえ～、やつぱり纏うオーラがいいなあ。そうだ！ 今度立ち合つて下さいよ。」

「おう。それはこちらも是非ともお願ひしたいな。いやあ、本当にまだ幼さが残つてるのになあ・・・。」

互いに褒め合つて試合の約束をするあたり、相性はよむそつである。

「まあ、立ち合ひはまた今度な。あと何日かは絶対安静だからさ、素振りでさえ禁止されてんだ。」

「あ・・・」Jは失敬。」

「気にしないでくれ。俺の力不足が招いた結果だ。」

そう言いながらも、鬼吉の表情は少し曇つている。

「北郷一刀、ですか・・・。」

「ああ」

「「「・・・・・。」」」

5人は黙り込む。北郷道場きつての使い手、鬼吉を圧倒した一刀の実力・・・。その根本的なものが何かは、未だに分からぬのだ。否・・・、

「理由はあれど、信じられない、か・・・。」

三国志の人物が全員女の子の世界で乱世を平定して鍛えられました、なんて話をいきなりされても、勿論信じられない・・・。

次真を除いては、だが・・・。

「貴方がここに来た理由、まあ察しはつきます。」

「一刀との試合の経過を話にしてくれたんですね?」

「そう気づいてくれているのなら助かるよ。」

いかに圧倒されたとはいへ、試合をしたといつては全く変わらない。現に次真達は、今の調整が終わったら鬼吉に話を聞きに行こうと思っていたのだ。

「で、実際のところはどうなんですか？」

「ああ……。正直言つて、こちらの攻撃が全て見透かされていた。」

「

「何……？」

「マジかよ……。」

義久は驚愕を露にし、次真は面倒なことだと言わんばかりに呟いた。

「それと、いっちの方が重要だろうな。」

「攻撃面のことですか？」

「やは。正直言つて……。」

鬼吉はやつ言いかけると、少し間をおいてから呟つた。

「……それこそ、人を殺せるような速さ・重さ・鋭さを備えている。」

『つーーー？』

人を殺せるようなくらいのその三要素のレベルの高さ……。尋常ではないことがよく分かる。

「なるほど・・・、鬼吉さんが氣絶したのがよく分かります。」

義久は鬼吉の強さをよく知つてゐる。なので、彼が氣絶するほどの一撃の凄まじさはすぐに理解できた。

「・・・教えていただけませんか？ あいつの癖とかを・・・。」

次真は、静かにそう言つた

。

一刀Side

昼前・屋外稽古場

あと二時間もすれば、二二で一刀と義久の試合が始まる。そして、結果によつては次真も試合をすることになる・・・。

「ふんつ！ ふんつ！ ！」

一刀は一人で黙々と竹刀を振り続けていた。その振りの鋭さは、常識を超えたものがある・・・。

しかし、彼は納得しない。こんな振りより、もつと凄いものを見た

「」ことがあるのであるから。

「はあ・・・・。やつぱり、竹刀じゃ物足りないな。なにせ向こうで
は刃を潰した本物の剣で鍛錬してたからなあ・・・。」

「この世界ではありえない話である。そんなことをしたら、銃刀法違
反で御用だ。」

「・・・・やつぱり、この世界は甘い。なんか、居心地も悪いしなあ・
・・・。」

「それは向こうが居心地が良過ぎたんじゃないのか?」

「・・・・? 誰だ!・・・」

突然背後から声が掛かった。叫んでみれば、叢から中一くらいの少
年が出てきた。金髪のウイングショートに蒼と緑のオッドアイとい
う、外国人みたいな容姿だ。

「突然すいませんね。」

「全くだよ。で、君は誰だい?」

「俺は片崎次真。ここで五ヶ月前から示現流を中心に剣を磨いてる。」

「なつ!? 君が片崎次真なの!?!?」

「うう、心外だな。まだほんのガキじやねえかなんて思つたんで
しょ？」

「い、いやあそんなどないよ……（図星）。」

「まつ、いいんだけどね。」

次真はやう言うと、一刀の目をしつかりと見始めた。対する一刀も、
決して背けたりはしない。

「・・・・・」

「・・・・・」

しばらく無言の状態が続いたが、それも長くはない。

「・・ふん・・。なるほどねえ・・・。」

「？？？」

次真は一刀を値定めのように呴く。

「確かに、鬼吉さんが敗れるのも頷ける。こりや並々ならぬ人物
に鍛えられたな・・・。」

「・・・よく、分かるね・・・。」

「まあね。あと、俺はあんたが異世界に行つたことは信じてるよ。」

「ああ、それは爺ちゃんから聞いてる。」

「やつか……。」

お互に言葉は交わすものの、緊張は解いていない。この後戦うかもしれないということを考慮すれば当たり前なのかもしれないが、今のこの一人の間に平氣で立てる者が果たしてこの道場にいるだろうか？ それほどまでに、空氣は逆立っていた……。

「何の用があつて、俺の所に来たのかな？ 俺は君達の敵だよ。相当失礼なことも言つたしね。」

「やうだね。門下生達は怒つてるよ。俺達があんたを叩きのめすところを見たいらしい。」

「ははは、嫌われるなあ。」

「自分でそうしたんだろう？」

「言えてる。」

そつ言ひやひこなや、一刀は再び素振りを再開する。次真の方も、来た道を引き返し始めた。が、途中で止まるといつもいた。

「あんまり舐めないほうがいいぞ。この世界が甘いからって、ここの人たちが全員墮落してるわけじゃがないからな。」

「（ブンッ！ ブォンッ！）……。」

「あんたは義久兄さんが杉崩しを使う前に仕留める気だらうが、あの人はそんなに簡単じゃないぞ。」

「（ブンツ！ ブォンツ！）・・・・・。

「まあ、せいぜい気をつ「おい。」・・何？」

「首洗つて、待つとけよ。」

フツ

「それ、こっちの台詞ね。」

共通Side

一時間後・同所

屋外稽古場には道場本館の全門下生と別館の門下生の一部、そして一刀の知り合いと思しき者数人が集まつた。斎昭や和那を始めとした門下生の一部は早速一刀知り合いと何かを言い合つてゐる。お

そらくは「どつちが勝つか」なんてことだらうが・・・。

「皆、静まれい。」

大きくはないがはつきりとした当主の声が響く。それだけで、場は先ほどまでは打つて変わつて静かになる。

「さて、今日ここに集まつてもらつたのは他でもない。今まで齧るほどしか剣道をしておらんだった我が孫；一刀じゃが、こやつは昨日の試合で別館の猛者達を次々と圧倒し、拳句には師範代の鬼吉をも破つた。」

ザワザワザワザワ

ここに来ている時点でのことを聞いてることが前提ではあったものの、やはり信じられないというのが皆の心中だ。が、当主の言葉として告げられるのならば違つてくる。改めて確認した事実はざわめきを起こすのに十分なものだつた。

「これこれ、静まれい。」

当主の声で再び静穏となる。

「わしもその経過を見ていたが、啞然とした。そして、我が孫ながらやるではないかと思つてしまつてのう。・・・じゃが、一刀は言いおつた。」

そこまで言つたところで、南側より一刀本人が登場した。そして、

『アノ言葉』を堂々と唱つた。

「俺は、ここに誰にも負けない。いや、負けることは出来ない。」

・・・・・。・・・・?

『ふざけるなっ！――！――！』

『舐めやがつてつ――！――！』

『いい気になるなっ！――！――！』

『何様のつもりだつ！――！――！』

ギヤー、ギヤーと罵声が起つる。しかし、彼は続ける。

「別にふざけてなんかいない。現に、今ここで俺に勝負を挑む勇気もないだろ？ それでいて舐めるなっか・・・。説得力がないよ。」

シンッ・・・

その言葉だけで、罵声は止んだ。

「俺は自惚れてなんかいない。ただ、事実を言つただけ。この道場・・・いや、この世界で俺に適う人はいないよ。」

『…………。』

一同、絶句といったところであろうか。誰も、何も言い返せない。それだけ、一刀の言葉には何かしらの説得力があつたのだった。

「…………まあ、まあそういうことじや。いやつはいつ思つておる。じやから」いや、今日の試合を組んだわけじや。一人とも、いやちらへ。」

「はいっー。」

「りょーかいー」

北側より、義久と次真が現れた。義久は既に面籠手をつけて臨戦態勢となつていた。が、

「…………次真、お主はなぜそんな格好をしておるのじや？」

「へつ？ うんとね、こっちの方が動きやすいから。」

「いや、じゃがその格好は示しがつかんといつか、根本的に〇一二
といつか
・・・。」

「まあいいじやん それより続きを続きてー」

「はああああ、勝手にせい・・・で、要するにじゅ。一刀はこの道場に自分に勝てるものはおらんと言いおつた。じゃから、この道場でも抜きん出て稽古を積んでいる義久と、すば抜けた実力の次真との試合を組んだのじゅ。といつても、一刀が義久に負けた時点で次真が試合をする」とはないんじゅかの・・・。」

当主は半ばあきれ返つた口調で説明を続けた。一刀は無表情に、義久は大真面目に、次真は欠伸をしながらも聞いている。

「まあ説明は以上じゅ。なら早速始めるとするかの。一刀、義久、準備せい。」

「ああ」

「おうひー。」

それぞれが支度にかかる。と、義久は次真の耳元に寄るとなにやら話し始めた。

「どうしたんすか?」

「いやな、なんでお前はその格好なんだと思ってな。」

「義久兄さんの勝利を半ば確信してといいたいとこだけど、まあ『本気』を出すための準備といったとこかな。」

「『本気』の準備?」

「ええ・・・。相手を『倒す』のではなく、『殺す』ための準備を、
ね・・・。」

「つー? おいおい、本当に殺す気じゃないだろ? な。洒落になん
ないぞ! ?」

「殺しはしませんよ。ただ、俺が試合をするということは義久兄さ
んが敗れるということ・・・。そのくらいの気持ちで行かないと、
俺も負けるから・・・。」

「なるほど。まつ、俺は全力でぶつかるだけだ。期待して観てろ。」

「了解」

そして、義久は既に準備が出来ていた一刀と向かい合う。

「勝負は一本。攻撃に関しての制限は一切設けぬ。ただ、勝負が決
した後も攻めを止めぬ場合は即刻失格じや。分かつたな。」

「「ああ(ええ)。」」

二人は答えると、竹刀を構えた。一刀は正眼、義久は堂々の大上段
だ。

「では・・・、始めつ! ! !」

「やあああ! ! !」

「おおおう……」

それぞれが掛け声で牽制する。互いに構えは変えない。

「どう見る、次真。」

「一刀はまるで隙がないな。それはもう、蟻の子1匹通さないって感じだよ。義久兄さんも同じだ。ただ、義久兄さんは大上段に構えているだけに、先に仕掛けないと不味いかも……。」

「そうね。できれば先に動いときたいとこね……。」

次真の分析に和那も同意する。意見を促した斎昭はうんうんと関心したような頷きを見せていく。と、

「せいつ……（ビュンッ）」

「（ガツ）つ！？」

義久が先手を取つた。隙がないとはいえ、打ち込まなければ始まらない。そういうことをよく知つてゐる彼は先に動いたのだ。大上段からの単純ながら強烈な面打ち。一刀はきつちりと防いだが、少し痺れたらしい。そこが付け目と思つたか、義久は同じ面打ちを繰り返す。一刀は防ぐ。が、焦りはみられない。どころか、非常に落ち着いている。

「ちつ……きえいつ！……（シユツ）」

「（ヒュツ、スツ）。」

面打ちは難しいと思ったのか、義久は今度は突きを連續で繰り出してきた。その速さは次真や鬼吉でも表情を険しくするほど鋭さだつたが、一刀は防ぐのではなくかわしている。その身のこなしは常人では真似できない部分があつた。

「なつ、これもかわすか……。なら、……（スウウウウウ）」

義久は突きを中断し、距離をとつて竹刀を八双に構えなおした。

「あの構え……、まさか！？」

「うん、あれは『杉崩し』の準備だな。義久の奴、ここで決めるつもりだ。」

「マ、マジー！？ やつた！…念願の杉崩しを観れる〜」

末男の解説に次真は大喜びだ。それを見た斎昭と和那は苦笑しつつも、自分達も興味津々で義久の動作を見ている。

「IJの秘技、いかにお前でも破れないぞ……。」

そう言つて、八双の構えのまま少しづつ間合いを詰め始めた。…
が、

「杉崩し、ね・・。くだらない」

「なつ！？」

「そんな技があるなら、さっさと使えばよかつたものを。」

「す、すいぶんと余裕だが、空元氣もいいところだぞ！！」

「ああそれ違うから。てか、そんな技があると知つて簡単に出来させるとと思う？」

「何!?

「『どんなに恐ろしい技でも、出す前に決めてしまえばいいんだよ。

「ふんっーーー（ブォンッーーー）」

ドガアアアッ！！！！！

「欸！？」

「が、がはつ・・・。」

ドサッ

次真達は啞然とした。一刀の姿が消えたと思った瞬間、義久の頭に竹刀が恐ろしい威力で振り下ろされていた。義久は突然のことに対応が遅れ、あえなく面打ちを食らつた。

「一本！…！ そこまでじや。勝者、一刀！」

『ガヤガヤガヤガヤ』

『ザワザワザワザワ』

観衆はざわつき始めた。何せ、一刀の圧勝だったからである。彼は面打ちの一撃しか放つていない。それが決定打となり、勝利したのだ。・・・格の違いを、見せつけるかの」とぐ。

「義久兄さん！…！」

「塾頭！…！」

「先輩！…！」

次真・斎昭・和那の3人は倒れた義久の元へ駆け寄つた。

「つ、負けちまつた……。」めんな、なんか無様だな……。」

「大丈夫なのか!? 物凄い衝撃だつたけど。」

「平氣だ、とは言えないな……。ちょっと、眩暈がする……。」

「しばらく安静にしてたほうがいいわよ。」

「ああ、それがいい。」

「すまん……。」

そう言つと、義久はこちらに走つてきた末男の肩を借りつつ、宿舎のほうに引き上げていつた。

「……少しばは氣遣つてもんを見せてもいいんじやないか?」

次真は先ほどから黙つてこちらを見ていた一刀に対してそう言い放つた。

「勝負に情けはいらないよ。」

「思いやつて言つ方は出来ないようだな。」

「悪い出来ない。」

「てめえ！―― さつきから言いたいように言いやがつて！――！」

「よせ斎昭！―― ここで怒鳴つても何にもならない。」

「ぐつ・・・。」

怒りの形相で一刀に怒鳴る斎昭を睨めつづ、次真は一刀から視線を外さない。

「『杉崩し』、受けた氣は無かったのか？」

「ない。それに、技を出す前に勝つて何が悪い？ のうのうしていつあつちが悪いんだ。」

「ちよ―― そんな言い方はないんじやないつ――！」

「事実だろ？ それに、元々から秘技なんかに頼るからいけないんだ。」

「なつ――？」

「教えてあげるよ。本当の強者はね・・・、秘技なんかに頼らない。純粹な一撃をもって敵を打ち碎く。それが、『本物』なんだ」

「・・・・・。」

和那も言葉を失う。言い返すことが出来ないようだ。 次真を除いては・・・

「よく分かった。」

「何が?」

「お前の状態がな。」

「どうこう」とへ。

「ただの押し付けだぞ、それ。」

「なつー?・・・どうこうとか説明してくれ。」

「要するに、それは向こうの世界でのことだつてこと。お前があつちでの仲間と共に歩んだなかで学んだつもりなんだろ?が、なつちやいなー。」

「なんだと?・・・(怒)」

「一へ、聞かとこや。」

次真は一尺の田の前に立ち、一歩立った

「『ヒヒ』は『お前がこの前までいた世界』じゃない。だから剣に関しても、価値観とかが違う。・・・その違いを無視して、お前の理想を押し付けるな、北郷一刀」

冷然と、告げた。しかし、一刀に動じた気配は無い。そして、口を開く。

「なるほど、確かにそつかもな。・・・なり、この世界に用は無い上。」

「まっ・・・、なりべつあるんだ?」

「これ次真、防具を着けぬか！　流石に危ないぞ。」

「爺さん、心配しないでくれ。俺は平氣だ。・・・むしろ、」
の方が緊張感があつてやりやすい。それと、先に謝つとく。

「な、何をじや？」

「一刀、叩きのめすから、そこ勘弁してね。」

「一・？」

「なつ・・？」

「まあ、義久兄さんの敵討ちつてここで考えとつて

「おおい次真、お主本氣か！？」

「ああ、マジで本氣だよ。」

次真がそういつた瞬間、

ドッ

『なつ・・・・・・・・・・・・』

彼の雰囲気が一変した。そして、とてもない闘気を彼から感じた。
・・・殺気が混じった恐ろしいほどの闘気を・・・。

「い、
一
体
・
・
・
?」

「あれが、次真の、本気・・・？」

齊昭と和那はそのあまりにも凄まじい闘氣に気圧され、動くことが出来ない。

「あやつの本気は物凄いものである」とは「」に来た当初からわかつていたとはいえ、まさかこれほどとは……。」

「いやあ、当主を超えてるかもなあ。。。。」「

「うむ、今のわしよつも遙かに上じや。」

「あちやあ・・・。なんか試合の約束しちゃったのは不味かつたかも・・・。」

当主と鬼吉は予想を超える鬪氣にたじろぎ、

「次真・・・、凄いじやねえか。」

「ああ、凄すぎる…………」

宿舎に向かう途中だつた義久と末男も思わず立ち止まつてその鬪気を感じていた。そして、一刀は・・・、

「（ガクガクガク・・・・）」

震えていた。

「（ガクガク・・・）（な、何なんだ・・・？・・・春蘭や霞の本
気に匹敵するよつな）の鬪氣・・・。」

愛しくも、恐怖する少女の名を呼び、震え続ける。

ゴオツ

瞬間、一刀も次真に匹敵するほどの鬪気を放出した。

「嘘つ！？」

「信じられん……。」

「もう滅茶苦茶になつてきて、訳がわからねえよ……」

最早、驚くことすらも諦めたという感じになりつつある。

「……驚いた。まさかそんな力があったとは。」

「それはお互い様。で、始めるの?」

「ふつ、さつきまで震えていた奴が言つ」とかよ……ま、それもやうだけどな。爺さん、審判頼むよ。」

「うん! お、おつかつた。」

北郷一刀と片崎次真……桁違の闘気を纏う一人が、今激突する。

「(確かに凄い闘気……だが、そんなにこの世界も甘くは無い。お前が見落としたもの、その重さを教えてやるよ。)」

「(俺は誓つたんだ……負けられない。否、負けない。だから・・・華琳・・・もつ少し、待つてくれ! ! ! !)」

「では・・・、始め! ! !」

ダツ！

互いに疾駆し、ぶつかる

(後書き)

肥後魚

「前半終了です。後半は多分10月以降になります。それまでお楽しみに～！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9153n/>

蒼神の軌跡「第三章の一歩手前」：前編

2010年10月8日15時20分発行